St. Luke's International University Repository

Practice of Continuous Support Exercises in an Area with Poor Living Cases

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 江川, 優子, 永井, 智子, 小林, 真朝, 麻原, きよみ, 河本, 秋子, 浦口, 真奈美, Egawa, Yuko, Nagai, Tomoko, Kobayashi, Maasa, Asahara, Kiyomi, Kawamoto, Akiko, Uraguchi, Manami メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00016379

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

短　報

生活困窮事例の多い地域における継続支援演習の実践

江川　優子[1)]　永井　智子[2)]　小林　真朝[1)]
麻原きよみ[1)]　河本　秋子[1)]　浦口真奈美[1)]

Practice of Continuous Support Exercises in an Area with Poor Living Cases

Yuko EGAWA[1)]　Tomoko NAGAI[2)]　Maasa KOBAYASHI[1)]
Kiyomi ASAHARA[1)]　Akiko KAWAMOTO[1)]　Manami URAGUCHI[1)]

〔Abstract〕

In order to develop the perspectives fundamental for public health nursing activities that relate the health and quality of life of people with the characteristics of the community they live in, we reviewed the content and methods of the "Public Health Nursing Exercise III" subject. This is one of the compulsory subjects for first-year students pursuing the advanced clinical practice course in Public Health Nursing.

The core of this subject is to conduct continuous home-visits for the users of the nursing services provided by a home-visiting station located in the Sanya region, which is inhabited by many needy people. Additionally, it involves conducting community assessment of the region, aiming at fostering the perspectives to explore support that focuses not only on individual and familial characteristics, but also on the characteristics of the community.

Through this subject, students learn that observing the lives of individuals and families in relation to the characteristics of the community they live in, and providing support by sharing these community characteristics with the contributing occupations are essential to realize the life that the people desired.

〔Key words〕 Public health nursing, community, community characteristics, poor living case

〔要　旨〕

地域特性に応じた保健活動の実践の基盤となる視点の育成を目的に，公衆衛生看護学上級実践コース１年生の必修科目である「公衆衛生看護学 演習Ⅲ」の内容および展開方法の見直しを行った。科目の軸は，生活困窮事例の多い地域（山谷地域）のコミュニティ・アセスメントを行いながら，同地域に所在する訪問看護ステーションの利用者に継続的に関わり，個人・家族特性のみならず，地域特性に着目した支援の展開を目指す演習にある。

本演習を通して，学生は，地域を意識し，地域特性と個人・家族の暮らしを関連付けて考え，連携する全ての職種が地域特性を共有した上で支援を考案していくことが，対象者の望む今後の暮らしの実現に不可欠であるという学びを得たと考えられる。

〔キーワーズ〕 公衆衛生看護，地域，地域特性，生活困窮事例

1）聖路加国際大学大学院看護学研究科・St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science
2）目白大学看護学部看護学科・Mejiro University, Faculty of Nursing

受付　2020年10月21日　　受理　2020年11月12日

Ⅰ．はじめに

2013（平成25）年に厚生労働省より「地域における保健師の保健活動について（平成25年４月９日付け健発0419 第１号）」が出された。その中の「地域における保健師の保健活動に関する指針」では，地域特性に応じた健康な地域づくり推進の方向性とそのための地区活動の推進が示され[1]，地域を意識した保健師の活動の重要性が改めて認識された。

保健師の「地域の人々の暮らしや健康を守り，人々が望む生活を目指して行われる活動」は，地域の人々や関係者／機関との協働，ネットワークづくりやケアシステムの構築が含まれ，地域全体をとらえる視点や日頃の活動を地域全体に結びつけて考える視点が不可欠である[2]。

公衆衛生看護学上級実践コース（保健師国家試験受験資格取得コース）において，この視点は今後の学習の基盤ともなる重要な要素である。コースの開設以来，様々な試みを実施してきたが，より学習効果を高めることを狙い，2019年度に「公衆衛生看護学演習Ⅲ」の内容および展開方法の見直しを行った。

本稿では，刷新した科目の全体像および生活困難事例の多い地域における継続支援演習の内容を紹介し，演習を通した学生の学びを報告する。

Ⅱ．科目の概要

本科目は，公衆衛生看護学上級実践コース１年生を対象とした２単位の必修科目である。

１．科目の目的・目標

科目の目的は，個別事例における地域特性および個人・家族特性に着目した継続支援を通して，対象の課題解決能力を高める支援を考察し提案することができることとし，以下の４つの目標を設定した。

１）個別事例における地域特性および個人・家族特性に着目した健康課題を抽出することができる。
２）複数回の家庭訪問により対象の健康・生活上のニーズを把握することができる。
３）対象者の課題解決能力を高める支援を考察し提案することができる。
４）地域ケアシステムの中での看護職（看護師，保健師）の役割を考察することができる。

２．科目の構成

本科目は，事前学習とプレゼンテーション，事例検討およびロールプレイング，コミュニティ・アセスメント，訪問看護ステーションでの実習から構成される。

１）事前学習

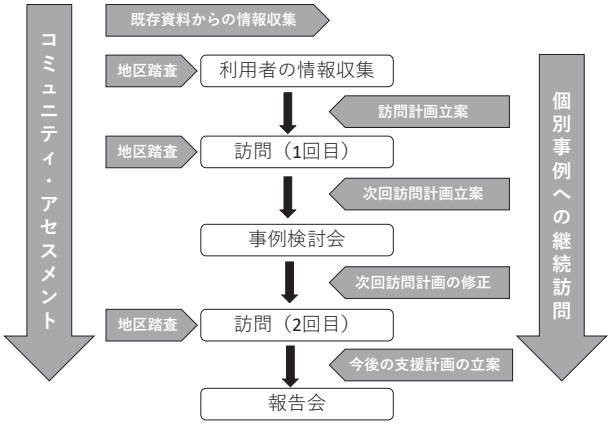

図１　生活困窮者の多い地域における継続支援演習の構造

①　コミュニティ・アセスメントに関する講義
②　訪問看護実習を行う訪問看護ステーションの所在地（所在区）の既存資料による情報収集

２）プレゼンテーション
在宅生活を支える法律や制度および地域ケアシステムに関するグループプレゼンテーション

３）事例検討
訪問看護実習を行う地域の特徴を有する家庭についての事例検討

４）ロールプレイング
３）で検討した事例に基づくロールプレイングの実施

５）訪問看護ステーション実習
個別事例を対象に継続した家庭訪問や健康相談等を通して顕在的・潜在的な健康課題を見出し，支援を考案する。

Ⅲ．訪問看護ステーションにおける継続支援演習

１．演習の概要

実習を行う訪問看護ステーションの所在地域である山谷のコミュニティ・アセスメントを行いながら，学生１名が訪問看護利用者１名を担当し，担当看護師と共に２回の継続訪問を通して個別支援を行う演習である。演習の構造は，図１に示す通りである。

２．演習の特徴

本演習の特徴は，訪問看護ステーションの所在地（訪問看護の提供地域）のコミュニティ・アセスメントと訪問看護を通した個別支援を並行して実施することにある。狙いは，以下の通りである。

１）地域特性とそこで生活する人々の暮らしを関連付け，地域の特徴から個別の生活の中にある顕在的・潜在的な健康課題・強みを捉える視点を養う。

図２　コミュニティ・アセスメント用紙

２）個別の事例に見出される健康課題の要因と対応策を，個人・家族の特性だけでなく，地域の特性とも結び付けて考察するプロセスを学ぶ。

３）多機関・多職種連携に基づくケースマネジメントや地域看護職の役割について考察する。

３．コミュニティ・アセスメント

コミュニティ・アセスメントは，コミュニティ・アズ・パートナーモデル[3]のアセスメントの構成要素（コアの生活を営む人々とコアを取り囲む８つのサブシステム）の枠組みに基づき作成したコミュニティ・アセスメント用紙（図２）に則って実施した。データは，訪問看護ステーションの所在区である台東区のホームページ・山谷地区の地図や航空写真・公的機関の刊行物などの既存資料，地区踏査，訪問看護ステーションでの実習を通した訪問看護利用者の暮らしの様子の観察や関わりから収集した。

４．演習の協力機関

１）地域の特徴

台東区と荒川区にまたがる日本三大寄せ場の一つであり，かつては日雇い労働者の街（簡易宿泊所の集まる「ドヤ街」）と呼ばれた山谷に所在している。江戸時代は，行商人や旅芸人が宿泊する木賃宿が多く集まる地域として知られると共に，遊郭として名高い吉原が隣接していたという歴史を持つ地域である。

第二次世界大戦の空襲で焼け出された人々が集まり，テント村が作られ，人々はそこから日雇い労働に出かけていったことがドヤ街としての山谷の原型となった。現在，簡易宿泊所（ドヤ）が約140件あり，約4000人が生活している[4]。ここに暮らす人々の殆どが仕事をすることが難しい単身・高齢の生活保護受給者である[5]。また，「寝泊り厳禁」と書かれた看板が掲げられている駐車場・駐輪場があるなど，多数の路上生活者がおり，生活困窮者が都内で最も多い地域とも言われている[6]。

２）訪問看護ステーションの概要

2000年に生活困窮状態にある人々への支援を目的に看護師によって設立されたNPO法人である。訪問看護事業を中心に，路上生活者への健康相談，介護保険対応のデイサービス，宿泊所事業を展開している。また，結核予防会結核研究所と協働した結核患者の発見と治療，山谷地域の労働者の職業斡旋や生活相談・健康相談などを行う労働福祉センターと連携した健康相談の実施，その他の支援団体や行政とも連携し，高齢化が進む山谷に暮らす生活困窮者をはじめとした住民の生活・医療支援を行っている。

３）訪問看護利用者の特徴

学生が訪問を担当する利用者の背景は様々である。しかし，多くは，路上生活から何らかの支援につながり，糖尿病を初めとする内科的な慢性疾患，精神的な疾患，障害を抱えていることから訪問看護を受けるようになった方々である。アルコールの過剰摂取，薬物依存の既往

写真１　山谷の街並み

写真２　山谷の街並み

歴，対人関係の問題，金銭管理に課題を抱えている場合も少なくない。医療的支援だけでなく，行政やNPO法人を初めとするフォーマル・インフォーマルな支援組織や地域の支援者などとの連携によって生活自体への支援を受けている方々が多い。

Ⅳ．学生の学び

学生の実習記録・レポートの記述，事例検討会・成果報告会での発言から，学生は，本演習を通して，主に以下の４点の学びを得ていた。

１．「地域」を意識する

学生達は，山谷地域の地区踏査について，「自分が住んでいる付近と違って車を置いている家が無く，自転車ばかり」「自分の実家の自治体にも貧困地区はあるが，規模が段違いに大きくて驚いた」「街そのものの衛生状態が悪くて驚いた」「高齢の男性ばかりで女性を殆どみかけない」「自販機の値段が安い」と振り返った。学生の振り返りから，山谷地域の地区踏査のプロセスで，山谷と自身の生活区域という２つの地域が見出され，比較されることで，両地域の特徴を捉えたことが読み取られた。

また，「同じ山谷の中でも，移動していくと場所によって人々の様子や街並み，街の雰囲気が違った」という観察も報告され，地理的な区域として一括される「地域」だけでなく，人々の生活が営まれ，その暮らしの特徴が現れる場としての「地域」が意識されていた。

２．地域特性と「暮らし」を関連付けて考える

学生達は，演習を通して，「暮らし」「暮らす」ということを考えるようになったと振り返った。利用者の「暮らし」と自身を含めた既知の人々の「暮らし」の在り様の際立った違いに，利用者の日々の生活がどのように成り立っているのか，つまり，利用者が山谷という地域にある，この住まいで，これまでどのように暮らしてきたのか，そして，これからどのように暮らしていくのかに関心が向けられていた。

訪問看護実習では，「山谷で暮らしていく方」という視点で利用者と関わり，その生活の様子を観察することで，個の「暮らし」の中に地域の特徴を読み取る視点，地域の特徴を意識しながら個の「暮らし」の中の強みや健康課題を見出そうとする視点の重要性が認識されていた。

更に，支援者として外側から地域を眺めて地域特性を読み取り，個別の支援に関連付けるだけでなく，利用者にとって地域がどのように捉えられているのか，つまり，日々の暮らしに根差した生活者の視点で利用者が実感している地域特性を理解することが，「その人らしい暮らし」を支え実現するために重要な視点であると考察された。

３．地域特性を共有した上での連携に基づく支援の必要性

学生は，訪問看護利用者のカルテ閲覧，担当看護師からの説明，利用者との実際の関わりを通して，複数の支援団体や支援者の連携を通じた支援が長年に渡って提供されてきたことで，利用者の現在の暮らしがあるという

ことを実感し，連携の重要性を認識していた。

連携においては，利用者に関わる全ての支援者が，利用者の居住地域の地理的区域としての特徴および利用者自身の生活者目線での地域の捉え方を理解し，支援者間で共有することが重要であると振り返られた。支援者間で利用者の暮らしと地域特性がどのように結びついているのかを考え，共有した上で，支援を考えて行くことが，「利用者らしい暮らし」「利用者が望む暮らし」の実現に必要であると考察された。

4．「その人らしい暮らしを支える」支援者としての姿勢

学生は，本演習を「幸せって何だろうって考えた」「（言い方は悪いけれど）このような状況でも人は生きていけるんだと思った」「価値観が揺らいだ」と振り返った。疾病・障害，複雑な成育歴，貧困や差別，犯罪など，何らかの要因で家族や社会から切り離され，路上生活を余儀なくされ，山谷に辿り着いた利用者のこれまでの生き様は，学生自身の持つ「幸せ」という概念とはかけ離れたものであった。しかし，利用者との関わりを通して「これからも山谷で暮らし続けたい」という願いや未来への希望を感じ取り，自分自身が捉えていた「幸せ」のあり方，すなわち，価値観を見つめ，問い直すこととなっていた。

自分自身の価値観という理解の「枠」を発見し，その枠を超えて対象を捉えようとした時，学生は，容易に解決できない多くの困難や生きづらさに満ちた利用者の暮らしの中に，日々の楽しみや喜びを捉えることができたと考えられた。楽しみや喜びを持つこと自体，そして，楽しみや喜びを生み出し支えるドヤの仲間や支援者との繋がりというコミュニティが利用者の持つ強みとして見出され，「その人らしい暮らしへの支援」への糸口として考察された。

自分自身の価値観という「枠」で対象者を理解し支援するのではなく，自分自身に「枠」があることを認識し，対象者の価値観を理解しようとする姿勢が「その人らしい暮らしを支える」礎となるという気づきを得ていた。

Ⅴ．考察と今後の課題

本演習を通しての学生の大きな学びは，個人や家族の暮らしと地域を関連付けて支援を考えて行くことが，支援の対象者の望む暮らしの実現に向けて重要であることを認識したことである。この学びの背景には，「地域」の捉え方の変化があると考えられる。本演習は，ある一定の地理的な区域のコミュニティ・アセスメントを行い，その「地域」の地域特性や健康課題を見出すことから始まった。しかし，訪問看護を通じて，利用者と関わり，この山谷の地で「その方が今後どのように暮らしていくのか」「どうすればその方らしく暮らしていけるのか」という問いを持ったことで，地理的な区域であった「地域」は，利用者が様々な人々と関わりながら日々の生活を営み続ける「暮らしの場」として捉え直されたと考えられる。その方にとっての地域，つまり，「暮らしの場」あるいは「暮らしのテリトリー」にある支援者も含めた人間関係の在り様や，それを下支えする社会文化的な背景を読み解こうとする視点の重要性を認識したと思われる。

また，本演習は，自分自身の「幸せ」の概念を揺さぶられることで，自身の価値観を問い直し，価値の多様性に直面する経験の機会であったと考えられる。多様な価値ゆえの支援の難しさを実感し，自らの持つ「枠」を超え，利用者の価値観を理解しようと努める支援者としての姿勢の重要性の体感に至ったと思われる。

本演習のプロセスで，学生は，暮らしと地域を関連付け，利用者の暮らしの様子を捉え，その強みや健康課題を見出すと共に，多職種が協働し住民の暮らしを支える地域ケアシステムのあり方とその中での看護職の役割を考察することができたと考える。公衆衛生看護学上級実践コースで学ぶ学生として演習に臨んだこと，つまり，自らも山谷のような特徴を持つ地域の担当保健師として活動する未来を見据えた視点で山谷に足を踏み入れ，アセスメントし，そこで暮らす人々とその暮らしを支える支援者に関わったことが，これらの学び，特に，地域ケアシステムおける看護職の役割の考察に繋がったと考えられる。

しかし，これらの学びを活かした具体的な支援策の考案には至らなかった。2回の訪問という限られた利用者との関わりでは，達成が困難な目標であるとも考えられるが，毎回の訪問後の振り返りの時間を十分に確保し，暮らしと地域を関連付けるという視点から，再度，訪問のプロセスを捉え直す働きかけをすることで，具体的な支援策の考案に結び付いていくのではないかと考える。

謝　辞

本演習の実施にあたり，ご協力いただきました特定非営利活動法人 訪問看護ステーションコスモスの職員の皆様，学生の訪問を受け入れて頂きました利用者の皆様に心より感謝申し上げます。また，共に学び，写真の提供を快諾してくださった公衆衛生看護学 演習Ⅲの履修生の皆さんに感謝いたします。

引用文献

1）厚生労働省．地域における保健師の保健活動について（平成25年4月9日付け健発 0419 第1号）．［Internet］．https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=00tb9310&dataType=1&pageNo=1［参照 2020-09-25］
2）平成28年度～30年度厚生労働科学研究費補助金　（健

康安全・危機管理対策総合研究事業)「地域特性に応じた保健活動推進ガイドラインの開発」. 地域特性に応じた保健活動推進のためのガイドライン. 2019
3）Anderson TA, McFalane J.（金川克子, 早川和生監訳). コミュニティアズパートナー：地域看護学の理論と実際. 第2版. 東京：医学書院；2007.
4）山下眞実子. 格差社会におけるセーフティネットの構築と在宅看護：住み慣れた地域で最後の時を. 日本看護倫理学会誌. 2020；12(1)：86-7.
5）池田利通. 23区格差. 東京：中央公論新社；2016.
6）山下眞実子. 大都市における生活困窮者の在宅ケア. 公衆衛生. 2014；78(9)：623-6.